

## ***M-GTA 研究会 Newsletter no. 18***

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：[grounded@ml.rikkyo.ne.jp](mailto:grounded@ml.rikkyo.ne.jp)

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

### **第 40 回 研究会の報告**

【日時】 2007 年 06 月 02 日(土) 13:00～17:30

【場所】 立教大学（池袋キャンパス）10 号館 x104 教室

【出席者(41 名)】

＜会員＞(34 名)

・阿部正子（筑波大学）・小嶋章吾（国際医療福祉大学）・宇津木奈美子（お茶の水女子大学）・清水寿子（お茶の水女子大学）・三輪久美子（日本女子大学）・升井恵美（医秀峰会）・小池磨美（高齢障害者雇用支援機構）・塩塚優子（青梅慶反病院）・庭野晃子（お茶の水女子大学）・横山登志子（北海道医療大学）・若杉里実（愛知医科大学）・藤好貴子（久留米大学）・佐鹿孝子（埼玉医科大学）・山口政之（千葉大学）・北岡英子（保健福祉大学）・標美奈子（慶應義塾大学）・千葉京子（日本赤十字看護大学）・山崎早苗（理学療法士）・隅谷理子（上智大学）・松繁卓哉（立教大学）・水戸美津子（自治医科大学）・藤野清美（新潟大学）・新鞍真理子（富山大学）・若林功（障害者職業総合センター）・武重有紀子（上智大学）・志田久美子（環太平洋大学）・鈴木依子（京都女子大学）・徳永あかね（神田外語大学）・堀内みね子（神田外語大学）・荒井きよみ（東京学芸大学）・山崎浩司（東京大学）・坂本智代枝（大正大学）・木下康仁（立教大学）・佐川佳南枝（立教大学）

＜見学参加＞(7 名)

・長山豊（金沢大学）・太田博子（桜美林大学）・伊藤祐紀子（北海道医療大学）・進藤和美（山口大学）・内田紀子（大和市日本語指導員）・河先俊子（フェリス学院大学）・西原由紀乃（山梨大学）

### **【総会】**

研究会に先立ち、2007 年度の総会が開催された。報告、議案など、すべて承認された。資料はこのニューズレターに添付してあります。

**【世話人会報告】**

9月8日（土）に札幌市で開催の第6回公開研究会の準備状況について報告があった。会員で今回の準備事務局を引き受けていただいている横山登志子さん（北海道医療大学）が出席され、研究会についてだけでなく当日夜の親睦会、宿泊のプログラムについても説明されました。すでにこのミューズレターより前に会員向け案内のチラシが送信されています。公開研究会は会員相互の親睦を狙いとして始まったという経緯もあります。

**【次回の研究会のお知らせ】**

第41回研究会は7月21日（土）に東京大学で開催の予定。詳細はメーリングリストでお知らせします。担当世話人は山崎さん。

.....

**【研究報告】**

発表者 坂本 智代枝 （大正大学 社会福祉学専攻）

発表演題

**精神障害者のピアサポート形成プロセスに関する研究**

**1. 研究テーマ**

長期入院の体験を持つ精神障害者が、長期入院から退院へと地域生活移行、さらに現在の生活に至るまでのピアサポート形成プロセスを明らかにすることが目的である。

ここでは、先行研究を踏まえピアサポートを「同じ問題や環境を体験する人が、対等な関係性の仲間として支えあうこと」と定義した。

**2. 現象特性**

長期入院の体験をもつ精神障害者が、退院から地域生活移行及び地域生活を構築するまでのピア（仲間）サポートの形成の直接的、間接的相互作用のプロセス。

**3. M-GTAに適した研究であるかどうか**

この研究の知見は、一つは当事者の視点からピア（仲間）サポートがどのように形成されていくのか、そのプロセス性に注目していること。二つには、当事者の暮らしの語りに基づいたグラウンデッド・セオリーを導くことである。

**4. 分析テーマの絞込み**

長期入院の体験を持つ精神障害者が、長期入院から退院へと地域生活移行、さらに現

在に至るまでの過程の中で、同じ体験をもつ仲間との支え合いがどのように形成されていくのか、さらに彼らがどのように「支え手」となっていくのかその経験的プロセスを明らかにしたい。

## 5. データの収集方法と範囲

本調査に対して理解と協力を得られた精神科病院の長期入院を体験し、地域生活を継続している精神障害者 19 名に対して、半構造化面接を行った。調査協力者には、調査の目的を説明した上で、調査の録音を了解してもらい、秘密保持と研究結果をフィードバックする旨を付記した承諾書を渡した。調査期間は、2003 年 10 月～2004 年 2 月及び 2006 年 8 月である。さらに、生成された概念とカテゴリーについて、調査協力者全員にフィードバックし、フォーカス・グループインタビューにより、さらにデータ収集した。

データ収集に際して、予めフォーカス・グループインタビュー調査をして、以下のよう

- にインタビューガイドを作成した。
- ① 長期入院に到った経緯と要因は、どのようなことであったか
  - ② 精神医療及び長期入院が当事者に心理的、社会的に与えた影響はどのようなことであったか（法律の変遷を踏まえて）
  - ③ 退院に到った経緯と要因は、どのようなことであったか。
  - ④ 退院から地域生活の移行の過程は、どのようなことであったか。
  - ⑤ 地域生活において、どのようなことが支えとなったのか。

データ収集の範囲は、A 市における地域生活支援センターの登録者（200 名）の中から、長期入院（ここでは、一回の入院で 6 ヶ月以上の入院を長期入院として定義した）を体験している 19 名の精神障害者が対象である。入院期間は 1 年から 35 年まで様々であったが、10 年以上の方々が大半を占めている。

## 6. 分析焦点者の設定

A 市の地域生活支援センター登録者で、6 か月以上の長期入院の体験をしていて、1 年以上地域生活を継続している精神障害者 19 名。

理由：①長期入院を体験した精神障害者の多くは、家族、友人等のソーシャルサポートが乏しい状況下で地域生活を開始する。

②諦めていた地域生活の継続を可能にしているものの大きな要素として仲間の支え合いがあったこと。

（生データを配布し、参加者に読んでもらった。）

**【質疑応答】**

- ① 分析焦点者の設定の理由について、「家族、友人等の」の友人は誰を指すのか  
→精神障害者同士の仲間としての友人のみならず、広い範囲の友人を指す。
- ② 精神障害者とは主にどの病名の人か。  
→統合失調症をもつ人である。
- ③ 分析焦点者の年齢構成はどうなっているのか  
→今回はレジュメに載せていないが、7割が50歳以上であり、60歳以上が6名であった。

**【スーパーバイザーのコメント(1)】**

- ① 精神障害者が地域生活を構築していく過程について、「仲間同士の支え合い」が大きな要因を占めていたということだが、地域生活を構築していく過程そのものの知見はあるのか。  
→ 量的研究や仮説検証型の研究は多いが、質的研究は少ない。そこで、当初は分析テーマの絞込みでは、「精神障害者が地域生活を構築していく過程」としていたが、その概念生成やカテゴリー化の結果、「仲間の支え合い」の要素が地域生活を構築していく上で、重要な動きのあるプロセス性をもつものだと考えたので、分析テーマとして絞って分析した。
- ② 分析テーマの絞込みの「支え手」というのは、精神障害者が同じ精神障害者に対して「支え手」となることだが、「支え手」も支えられるという相互作用があるため、分析焦点者があいまいである。分析焦点をその相互作用そのものにすることもできるが、難しい作業である。
- ③ どのような現象を説明したいのかという問いを常に検討していくことで、分析テーマの絞込みが深まっていく。
- ④ 生データの中からは、「仲間の支え合い」の現象を明確に読み取ることはできない。「仲間とのやりとり」の事実は語られているが、そのときの思いは語られている部分が少ない。分析テーマの絞込みを狭く絞りすぎるのではないか。

**11. 方法論的限定の確認**

①研究協力者がA市の35年精神障害者の地域生活支援を先駆的に実践してきたA法人の地域生活支援センター登録者であるため、同じ環境下ということで特殊であると認識される可能性が高い。しかし、歴史ある実践からの知見を他の実践現場のデータと比較継続分析することで、理論生成できるのではないか。

②研究者自身が、10年間A法人の地域生活支援の実践に携わってきた経験があることから、常にデータから解釈するように意識化した。しかし、リサーチクエスションは、実践の中で専門職が意識化しない間に、日常的に仲間の支え合い、つながり、結びつきが生まれ、それが精神障害者の支えになっていることである。

## 12. 論文執筆前の自己確認

①本研究の目的は、長期入院の体験を持つ精神障害者が、長期入院から退院へと地域生活移行、さらに現在の生活に至るまでのピアサポート形成プロセスを明らかにすることが目的である。

### ②本研究の社会的意義

精神障害者の長期入院の問題は、WHO も指摘しているとおり、世界的にも大きな人権問題である。昨今社会的入院者は、72,000 人にもなりその多くは 50 歳以上が大半を占めており、人生の長い期間病院で暮らしている状態の精神障害者である。それに対する国の施策として、平成 12 年度から開始している大阪府の退院促進支援事業をモデル化して、平成 15 年度より国の事業として全国で開始され始めた。しかし、障害者自立支援法下で地域生活支援事業に位置づけられるようになる等自治体の裁量権に任されるという状況である。一方長期入院及び社会的入院の問題に対して、国は 10 年間で 72,000 床を減らすことを数値目標にしている。しかしながら、精神障害者の地域生活支援体制も整っていないのも現状である。そこで、本研究のピアサポート形成を軸にした地域生活支援の方策を示すことである。

### ③ 本研究の学術的意義

精神障害者の地域生活支援には、医・職・住・仲間が必要だとして実践活動から施策化されてきた経緯がある。地域生活支援活動における仲間の支え合い活動の実践は、1970年代から開始された。さらに精神障害者の地域生活支援活動の展開は、現在の精神障害者の地域生活支援活動の根幹をなすものである。そのような中、近年では「ピアカウンセリング」「ピアヘルパー」「ピアサポート」等の実践活動が報告されるようになってきた。それらは、ピアサポート活動の意義や意味に価値を置き、精神障害者のリカバリーに大きく影響を与えていることも実践報告から見えている。

一方海外の精神科リハビリテーションにおいても、リカバリーの概念の研究 (Anthony : 1993、Deegan 1988、Davidson2005) が精神障害をもつ当事者のナラティブを通して発展し、精神科リハビリテーションの考え方の転換がなされている。さらにリカバリー研究の中で、Mead, S Ellen, M (2000) らはリカバリーの重要な要素を「①希望があること、②自分の健康に責任をもつこと、③教育は人生とともにあるプロセスである、④自分自身を擁護すること、⑤ピアサポートはリカバリーの重要な構成要素である」としている。リカバリー志向サービスのためのガイドラインとして、14 項目を示し、その中で「精神障害をもっている人たちと交流することを励ますことと、サポートすること」とピアサポートをリカバリーの重要な構成要素として位置づけている。また、Corrigan らはピアサポートグループ (GROW) の精神障害者を対象に質的分析した結果、ピアサポートがもっとも突出してリカバリーに影響を及ぼしていたということが示されている。(Corrigan ら : 2005)

わが国では、長期入院の精神障害者の問題に対して、量的な調査によりニーズを評価されることが多く、そこからは、精神障害者が抱えている長期入院による苦悩や思いのプロセス等を示すことはできない。そこで、本研究では長期入院の体験をした精神障害者に焦点をあて、質的調査を通して当事者の語りから日本の実践現場に即したグラウンデッド・セオリーを導くことに意義がある。

本研究がオリジナルに提示できる結論は、長期入院を体験した精神障害者の地域生活支援の実践課題は、精神障害者が「支え手」となっていくプロセスが、地域生活やリハビリに重要な効果をもたらしていることである。これを踏まえ、ピアサポート活動の支援者の実践ガイドを作成したいと考えている。さらに、今後の研究計画として、ピアサポート活動の支援者（主に PSW）に焦点をあてて、ピアサポート形成に対して、支援者がどのように影響を及ぼしているのか、支援者との関係形成プロセスの質的調査を実施する予定である。

#### 【スーパーバイザーと参加者からのコメント(2)】

- ①データのヴァリエーションから無理に分析テーマにひきつけているので、概念名と定義に無理があるのではないかと。データから考えると分析テーマを広く捉えてもよいのではないかと。
- ②結果図の中の概念間の関係が描かれていないため、動きが平板化している。概念間の関係が表現できると結果図に動きが出てくるのではないかと。
- ③プロセスには始点と終点があるが、始点はどこで終点はどこなのか。  
始点をどこにし、終点をどこまでとするのかを検討する必要がある。  
→退院して仲間に支えられた体験が始点で、「支え手」を担っていくことを終点とした。
- ④どこが中心カテゴリー(コア)になっているのか、コアになっているカテゴリーとその他のカテゴリー間の重みづけが明確ではない。  
→【体験に光りを見出すカテゴリー】がコアになっているが、他のカテゴリーとの関連が明確ではない。
- ⑤対極例が示されているが、対極例の中にも概念生成できるヴァリエーションが含まれているのではないかと。対極例も丁寧に分析する必要がある。
- ⑥出された生データからは、仲間の支え合いよりも「25年の入院から退院に切り替わったプロセス」という「どのように生活を成り立たせてきたのか」等を明らかにするほうがよいのではないかと。

- ⑦「支え手」になることのプロセスが、現実的に地域生活を可能にしている要件との関連をみていくことで、広く深くデータから概念生成できるのではないか。
- ⑧語られているデータに事実が多く、インフォーマントの認識や思いが表現されていない。  
→文脈では事実のみ捉えられるが、語っているときの表情や声をトーン等によって感情や思いが込められていた。そのようなインフォーマントの状況も記録化しておく必要がある。
- ⑨概念生成からカテゴリー化するプロセスに、動きがなく概念とカテゴリーとの関連が明確ではない。もう少し、関連性を分析する必要がある。
- ⑩19名のデータからは、貴重な精神医療の体験が語られていると思うので、そのような体験にも目を向けて、分析してみてもよいのではないか。  
→確かに精神医療での劣悪な体験が、仲間意識や思いやり、これからの人生を大切に生きていく意識にもつながっている。逆に仲間との関係形成の阻害要因にもなっている。  
→「支え手」になっていくプロセスについて、阻害する要因や促進する要因等を含めた概念生成をすることで、リアルに動きのある現象として説明できるのでないかと考えた。

#### 【まとめ】

- ① 今回、生データから概念生成へ、さらに結果図とストーリーラインまで報告させていただいたことで、改めてデータに密着することの意義を理解することができた。
- ② データに密着した上での分析テーマの絞込みを検討する必要があることと、どんな現象を表現したいのかを常に検討しておく必要があることを理解することができた。
- ③ 今回の報告から得たことを踏まえて、早く投稿できるようにまとめるようにしていきたい。

木下先生、スーパーバイザーの佐川さん、山崎先生、司会の阿部先生さらに参加者の皆様から、貴重な時間と体験をさせていただいたことを深く感謝しております。ありがとうございました。

#### 【スーパーバイザー・コメント1 山崎浩司】

(東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター上廣死生学講座講師)

前回より理論的メモが充実し、坂本先生が概念をどのように生成されたのかを、今回はよく拝見できました。ただ、そこに記された概念間関係の吟味には、まだ精緻化の余地があるように思います。

2つの概念を比較検討する際、両者の間に「動き」を生み出す関係性がないかどうかを、より意識的に探ってみてはいかがでしょうか。例えば、概念aは概念bの条件になってい

ないかとか、概念 d は概念 c の帰結になっていないかとか。ふつう、カテゴリー化の意識は強いので、概念群が類似的か対極的かを見る関係性吟味は行われます。でも、それだけでは、カテゴリーごとに概念が単に列挙されただけになりかねません。

もちろん、カテゴリーを構成する概念群が、必ず動きのある関係性になくてはならないわけではありません。例えば、カテゴリー間関係で、カテゴリーA がカテゴリーB 成立の条件であるとき、そのカテゴリーA が、概念 a、概念 b、概念 c という動きのない並列関係にある 3 つの条件的概念で構成されていることも、無論あるわけです。ただ、この場合でも、それが概念間に動きのある関係性がないかを吟味した結果であることが重要です。

ところで、この研究が解明したい現象ですが、その始点と終点を坂本先生がどう設定されたのかが気になりました。「彼らがどのように「支え手」となっていくのか」という分析テーマから推測すると、終点は分析焦点者が「支え手となった」（と意識した？）時ということでしょうか。あと、始点はどうでしょうか。

最後に、坂本先生が苦勞して収集されたこのデータは、独自の理論生成を可能にするポテンシャルを十分にもっていると思いました。個人的にこのデータの独自性は、精神障害患者同士よりも、彼らと看護人など病院スタッフとの社会的相互作用にあると考えますが、これは【研究する人間】である坂本先生ご自身が判断されることなのは無論です。この研究のさらなるご発展をお祈りします。

## 【スーパーバイザー・コメント2 佐川 佳南枝】

（立教大学社会学研究科後期課程）

長期入院生活を送ってきた統合失調の患者さんが安定的に地域での生活を維持していくのにはどうしたらよいのかというのは、実践的にも政策的にも非常に重要な今日的課題であり、研究の意義は評価できると思います。

ところでこうした人々の地域生活の維持に対してピアサポートが非常に重要な役割をもっているということは理解できます。しかし、もともとのインタビューが、ピアサポートを中心に聞かれたものではないために、ピアサポート形成プロセスを表すことに成功していないように見えます。実際のインタビューでは長期入院に至った経緯や退院、地域生活に移行していく過程や地域生活の様子が幅広く聞かれています。データをみても、地域生活を維持させている要因は、ピアサポートの他にも、スタッフの緩やかな見守りとか（ピアサポートほど大きな支えではないとしても）ありそうですね。また、地域生活を危うくするようなこともありそうです。こうした地域生活を安定化する要因と危うくするような要因、それらがどのように関係しあって地域生活が維持できているのか、その中でピアサポートはどの位置にあってどのように働いているのか、というようなことが結果図として表せるようなイメージで、分析テーマを設定したらいいのではないかというふうに考えました。つまり分析テーマを狭く絞り込みすぎてしまったためにピアサポートの機能の



重要性についてもうまく表せていないのだと感じられました。また結果図の概念をみても、どれも命名の独自性が弱く、説明的であり、どれが中心概念となのかがわかりません。またカテゴリー間の関係性もよくわかりません。

また、今回の例では対極例の検討の重要性もあらためて認識できました。ワークシートにある概念よりも対極例の方に、注目してしまうことが多かったからです。これらの対極例として挙げられたものから、概念化できるものもあるのではないのでしょうか。（それが先に述べた阻害要因などになってくるものかもしれません。）対極例は、手続きとしてチェックしていただくだけではなくて積極的に分析に取り込んでいくことが重要だと思いました。

### 【編集後記】

・2週間ほど経過しましたが、6月2日の研究会の報告です。研究会の持ち方を工夫しながらということで、今回は報告者を一名とし、データを含めて詳しく検討しました。また、スーパーバイザーを二人として、視点の多様化を試みました。このニューズレターにもお二人からコメントをお願いしました。坂本さん、山崎さん、佐川さん、ご苦労様でした。

・当日、立教大学は、はしかの二次感染防止措置による休校期間中で研究会で使用した教室の建物も閉鎖されていることが直前にわかり、急きょ対応しました。いつもよりわかりにくく、ご迷惑をかけたかもしれません。

・総会の資料にありますように、ニューズレターは今後毎月発行することになりました。もちろん研究会の報告はこれまで同様ですが、それだけでなく研究会のない月にも、M-GTAに関連したことがらや、広く質的研究（法）について、また、関連情報の提供などのために、月一度出していく予定です。目下、編集方針や紙面企画について検討中です。定期刊行となると恐怖のプレッシャーにおののきますが、できるだけがんばってみます。どうぞ、お楽しみに。

・いつものお知らせですが、研究の成果を論文で発表された方は、別刷りを一部事務局にお送りください。また、連絡先に変更のある方は事務局の佐川さんにお知らせください。

・16日、17日の週末、大学の地区保証人会と校友会のため甲府市に出張してきました。土曜の午後に在校生の父兄対象の説明・懇談会、夜は卒業生の校友会の集まりで、この方式で立教大学では毎年全国20か所前後で実施しています。学部長はノルマで2ないし3回参加します。私学なので特にそうかもしれませんが、133年の歴史を支えてきた校友の力をいつも実感させられます。皆さんにはどうでもいい話ですが、2点お伝えしたくて書き始めました。甲府はなんと34度で日差しも強烈でとにかく暑かった（これもどうでもいいことです）。で、次回の研究会の7月21日ですが、今度は新潟でのこの行事への出張と重なり、会場とプログラムを世話人の山崎さん（東京大学）にお願いしています。どうぞ、ご予定ください。

（木下記）